

丹 出 祥 子 乞 乞

第 65 号

## 言語(獲得)理論と方言研究

村 杉 恵 子

『アカデミア』文学・語学編  
第65号 抜刷 1998年9月  
南 山 大 学  
名古屋市昭和区山里町18

ACADEMIA Literature and Language  
(65) Offprint September 1998  
NANZAN UNIVERSITY  
18 Yamazato-cho Showa-ku Nagoya

## 言語(獲得)理論と方言研究

村 杉 恵 子

### 1 はじめに

言語の理論的研究は、経験的事実に関する記述に基づいているが、理論的な発展に貢献する経験的事実の多くは、英語や日本語といった、いわゆる「言語」の事実から引き出されるのが一般的である。しかし、Chomsky (1988) 等において詳しく論じられているように、言語研究の対象となる「言語」とは、(1 b)に示すような、いわゆる社会的、政治的な共同体に共有される現象を指すのではなく、(1 a)に示すように個人の心(脳)にあらわされる体系を指す。

- (1) a. 個人の心・脳にあらわされる体系
- b. 社会的な共同体に共有されている現象

この立場に立つと、従来、(2 b)のように考えられきた「方言研究」は、むしろ(2 a)のように捉えられることになる。

- (2) a. 個人の脳に内在する言語の原理と性質が、どのように異なり、どのような関連性をもつのかについての研究(非言語的研究も含む)
- b. ある一定の地域・社会階層で使われている地域的・社会的な変種としての言語の総体を音韻、統語、語彙などの面からの研究

「言語」も「方言」も、あくまでも個人の脳に実在する言語知識を意味するのであるから、Chomsky (1988) が例にあげるように、たとえば、中国語で方言差として捉えられるものは、ロマンス諸語の違いと同じ程度に異なるという事実も納得できる。また、オランダの国境で話されているドイツ語の変種は、その付近に住むオランダ人には理解されるが、離れたところに住むドイツ人には理解されないという事実も当然のこととして理解される。このような見地に立つと、いわゆる「言語」といわゆる「方言」は、言語理論研究に対して、同じステイタスで貢献ができることになる。

方言に関する記述的な研究は多く、フィールドワークによる多くの方言記録が残され、分析が加えられている。しかし、その一方で、生成文法理論などの理論的背景を基盤に方言を扱う研究や、方言データをもとに、理論的仮説を実証する研究報告は、未だに多くはない。本論では、いわゆる「言語」のみならず「方言」が、言語理論研究及び言語獲得理論に対して、直接的な経験的事実を提供する研究事例を概観する。

## 2 名詞句の構造とその獲得：富山方言，韓国語，熊本方言からの貢献

日本語の名詞句において、属格助詞「の」は名詞句 (NP) 及び後置詞句 (PP) と主要部の間に挿入されるが、形容詞句 (AP) や関係節 (relative clause) と主要部との間には挿入されない。大人の文法において属格助詞が挿入されて文法的とされるのは (3 a) と (3 b) のみである。

- (3) a.  $[_{NP} [_{NP} \text{山田さん}] \text{の} \text{本}]$   
 b.  $[_{NP} [_{PP} \text{大学まで}] \text{の} \text{道}]$   
 c.  $[_{NP} [_{AP} \text{美しい}] \text{道}]$   
 d.  $[_{NP} [_{rel \text{ cl}} \text{山田さんが書いた}] \text{本}]$

ところが、日本語を母国語とする子供の中で、2歳から4歳にかけて、(4)に示すような名詞句を生成する子供がいることがよく知られている<sup>1)</sup>。

- (4) a.  $[_{NP} [_{rel \text{ cl}} \text{青い}] \text{の} \text{ぶうぶう}]$  (Clancy, 1985)  
 b.  $[_{NP} [_{rel \text{ cl}} \text{キリンさん食べてる}] \text{の} \text{葉っぱ}]$  (E: 3; 0)  
 c.  $[_{NP} [_{rel \text{ cl}} \text{違う}] \text{の} \text{おうち}]$  (E: 3; 0)  
 d.  $[_{NP} [_{rel \text{ cl}} \text{ご飯食べてる}] \text{の} \text{ブタさん}]$  (E: 3; 0)

なぜ、このような過剰生成が言語獲得の一過程においておきるのか。Murasugi (1991) では、この過剰生成が英語にはみられないことを指摘し、文法の原理とパラメーターの観点からこの種の過剰生成がどのように説明されうるのかについて考察している。

まず、第一の仮説として、格理論に基づく説明が可能か否かを検討している。特に、Kitagawa and Ross (1982) (以後、K&R) の属格付与に関する仮説を採用すると、子供の(5)のような過剰生成をうまく説明するのではないかと仮説を立て検証する。

K&R は、中国語や日本語の大人の文法において、属格は次のような規則によって付与されると考える。

- (5) 仮説 I  
 a. MOD-Insertion Rule:  $[_{NP} X NP] \rightarrow [_{NP} X \text{MOD} NP]$   
 b. No-Deletion Rule:  $[_{NP} X \text{MOD} NP] \rightarrow [_{NP} X NP]$   
 where: (a)  $NP \neq e$ , and (b)  $X = [\dots \text{tense} \dots]$   
 (Kitagawa and Ross, 1982)

どの言語も、属格は (5 a) に示すように MOD-Insertion Rule によって付与される。例えば、中国語では、この規則にしたがって、(3) のような構造のもとでは、修飾句と主要部との間に統べからく属格(的)が挿入される。

但し、言語によっては、更に (5 b) のような規則が存在する。例えば、日本語では、(5 a)によって、時制を持つ修飾句と主要部との間の属格助詞が消去される。

この大人の文法を仮定すると、(4)に示した言語獲得のデータは、子供が MOD-Insertion Rule のみを適用している段階と分析される。(4)は日本語の大人の文法では非文となるものであるが、中国語の大人の文法では文法的であることをふまえると、(4)のような名詞句を生成している子供は、その時期に中国語の文法をもっていることになる。そして、後に日本語特有の (5 b) のような規則を獲得し、その時点で、(4)のような過剰生成をやめると考えることができる。

もし、MOD-Insertion Rule が子供の(4)のような過剰生成の段階で適用されているのならば、この段階にある子供のもつ名詞句構造は以下のようであると予測される。

- (6) a. [NP [NP ] の N]  
 b. [NP [PP ] の N]  
 c. [NP [AP ] の N]  
 d. [NP [rel cl ] の N]

この仮説が正しいか否かについて、実際の子供の言語獲得データを実験的に検証した結果、Murasugi(1991)では、まず、同時期のこどもが、(6 a) のような構造のもとでは、大人と同様、属格助詞を挿入することができることを報告している。

- (7) NP の N  
 a. えみちゃんのジュース  
 b. めがねのおじちゃん  
 c. 部屋のおかたづけ



すなわち、この過剰生成の段階にある子供は、(7 d)に示すように、名詞句による修飾句と主要部との間に正しく属格助詞を挿入する。これは、格フィルター（音形をもった名詞句は格をもたなくてはならない）という普遍文法の原理にしたがっているためと考えられる。

ところが、興味深いことに、この時期の子供は、後置詞句の修飾句と主要部との間には、属格助詞を挿入することができない。関係節のあとには不必要な「の」を挿入している子供が、(8)のような構造においては（大人の文法では属格助詞を挿入すべき環境であるにもかかわらず）「の」を挿入しないという「過小生成」が起きている。

- (8) PP の N  
 a. 東京までバス（または「東京のバス」） (Yusuke, 3; 0)  
 b. サンタさんからプレゼント（または「サンタさんのプレゼント」）  
     (Mari, 2; 9, Emi, 3; 0)  
 c. 神戸のおじいちゃんからお手紙（または「神戸のおじいちゃんのお手紙」）  
     (Emi, 3; 0)

Murasugi (1991) では、この子供の過小生成の事実は、(6)のようなパラダイムを子供が問題の時期に持たないことを示していると考えられる。すなわち、(4)のような「の」が過剰生成されるのは、子供が MOD-Insertion Rule を名詞句の生成に適用しているためではないことになる。つまり、K&R の仮説を採用することによっては、この過剰生成の理由は説明されえない。このことは、(4)で過剰生成されている「の」が、格（属格）ではない可能性を示唆する。

では、いったい、この過剰生成された「の」はどのような範疇を担うもののなのか。ここで、Murasugi (1991) では、まず、大人の文法において、「の」には以下の三種の文法範疇に属するものがあるとする統語的分析を提示する。

(9) 統語的に3つに分類される「の」

a. Genitive Case

[<sub>NP</sub> [<sub>NP</sub> 山田さん] の 本]

[<sub>NP</sub> [<sub>PP</sub> 大学まで] の 道]

b. Category N(oun)

[<sub>NP</sub> 赤い の]

[<sub>NP</sub> 太郎 が (/の) 走っているの] が見えた

[<sub>NP</sub> 食べすぎるの] はよくない

c. Category C(omplementizer)

[<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> だろぼうが金を盗んだ] の] はここからだ

三種のうちのひとつは (9 a) に示すような属格助詞の「の」である。二つ目は (9 b) にみるような名詞 (N) としての「の」である。この N としての「の」の中でも、代名詞にあたるものには、例えば Kuroda (1992) が<sup>(10)</sup>に指摘するように尊称の代名詞としてはそぐわないものであるという特徴がある。

(10) Kuroda (1992): the pronoun “no” has a derogatory connotation, and is not compatible with the honorific marking of the main verb.

(10)を示す例として(11)をみてみよう。この例にみるように、N としての「の」は「先生」の代名詞としては適格ではない。

- (11) a. お年をめした先生が大勢おられる  
b. #お年をめしたのが大勢おられる

同じ N としての「の」は、代名詞だけではなく、Nominalizer としても機能する。例としては、(12 b) に挙げるようなものがある。

- (12) a. お年の先生がお食べになりすぎることはよくない  
b. お年の先生がお食べになりすぎるのはよくない  
c. お年の先生のお食べになりすぎるのはよくない

この場合の「の」が名詞であることは、(12 a) に示すようにそれが「こと」に置き換えられることからだけではなく、(12 c) に示すように名詞を主要部にもつ補文に特有の統語現象であるところの「が」—「の」交替がみられることから明らかである。

「の」には、属格や N としてのものばかりではなく、(9 c) にみるように、いわゆる分裂文にあらわれるものがある。

- (13) a. [ジョンがロブスターを食べたの] は [ボストンで] だ  
b. ?? [ジョンのロブスターを食べたの] は [ボストンで] だ  
c. It was [for a good reason] that I stopped you (McCawley, 1988)  
d. It is [to Cleveland] that John drove the truck

英語の分裂文の場合、(13 c) および (13 d) に示すように、前置詞句を焦点にもつことができるが、(13 a) に示すように日本語の場合も同様である。この場合の「の」は英語の *that* に対応し、補文標識であると考えられる。

(13 a) の「の」が (12) の名詞としての「の」とは異なる統語範疇に属することは、(13 b) に示されているように、「が」—「の」交替をすると容認

可能性が落ちることからもみることができる。

以上の大人の文法に基づくと、過剰生成されている「の」は(14)に示すように属格か、名詞としての「の」か、もしくは、英語の *that* に相当する補文標識の「の」かの、いずれかであることになる。では、(14)に示す三種の「の」のうち、いったいどの「の」が(4)において過剰生成されているのか。

(14) a. Genitive Case

b. Category N

c. Category C

しかし、文法的に区別されるべき三つの「の」が、いわゆる東京方言では、音声的には区別されないことから問題はより複雑になっている。もし、これらの「の」がそれぞれ別の音声をもって表れるのであれば、子供が過剰生成する「の」がどの音声表記をもつのかによって、その実態は明らかになるはずである。

Murasugi (1991) では、富山方言では、その大人の文法において属格は(15)に示すように、東京方言と同様「の」をもって表れるが、他の二つの範疇は「が」で表れることに着目する。

(15) 富山方言

Genitive Case : 「の」

a. [NP [NP 山田さん] の 本]

b. [NP [PP 大学まで] の 道]

Category N : 「が」

c. [NP 赤い が]

d. [NP 走っている が]

Category C : 「が」

e. [CP [IP だろぼうが金を盗んだ] が] はここからだ

このような大人の文法をもつ富山方言を話す子供が問題の過剰生成をおこすとき、いったい、「の」(属格)を過剰生成するのか、それとも、「が」(N または C)を過剰生成するのかについて実験的に調査した結果、Murasugi (1991)は(16)のタイプの過剰生成をする子供が20名中2名いたことを報告する。そして、そこで、過剰生成された要素は(17)に示すように「の」ではなく、「が」であった。

(16) =(4)東京方言

a. [NP [rel cl 青い] のぶうぶう] (Clancy, 1985)

b. [NP [rel cl キリンさん食べてる] の 葉っぱ] (E: 3;0)

c. [NP [rel cl 違う] のおうち] (E: 3;0)

d. [NP [rel cl ご飯食べてる] のブタさん] (E: 3;0)

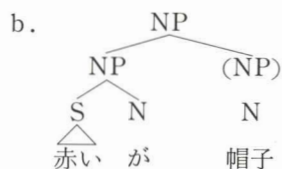
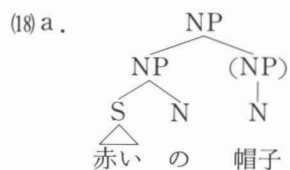
(17) 富山方言

a. [NP [rel cl 赤い] が帽子] (Ken: 2;11)

b. [NP [rel cl アンパンマンついとる] が コップ] (Ken: 2;11)

もし、(4)および(16)の「の」が属格助詞の「の」であれば、富山方言でも「の」が表れるはずである。しかし、実際には、(17)に示すように「が」が過剰生成されていたことから、関係節と主要部との間に過剰生成された「の」は、属格助詞ではなく、名詞(N)または補文標識(C)であることが判明する。

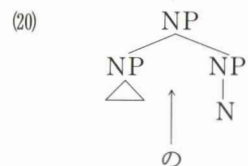
では、過剰生成された範疇は名詞なのか、それとも補文標識なのか。まず、名詞が過剰生成されたと仮定してみよう。すると、(4)、(16)、(17)に示すような問題の名詞句は(18a)、(18b)のような構造を持つことになる。(18a)は東京方言の例で、(18b)は富山方言の例である。



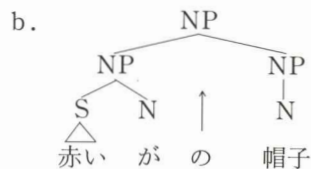
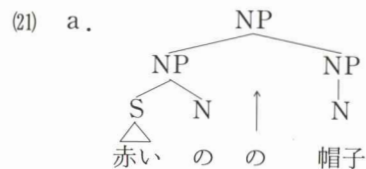
前述したように、この過剰生成の時期の子供は、名詞句に属格を付与することができる。例えば、子供は、(19)のような例の名詞句を産出している。

- (19) a. ママのなまえ  
b. お山のお花  
c. お部屋のおかたづけ

すなわち、(20)のような構造において、属格助詞が名詞句と主要部との間に挿入されなくてはならないことを、子供は知っていることになる。



したがって、(18)のような構造のもとでは、子供は、(21)に示すように属格の「の」を挿入し、(22)のような名詞句を産出をすることが予測される。



- (22) 子供が(18)の構造をもっていると仮定したときに予測される子供の産出

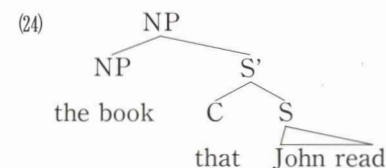
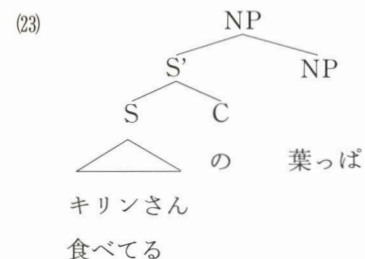
東京方言

- a.  $[_{NP} [_{NP} [_S \text{ 青い}]] \text{ の} ] \text{ の } \text{ふうふう}$   
b.  $[_{NP} [_{NP} [_S \text{ キリンさん食べてる}]] \text{ の} ] \text{ の } \text{葉っぱ}$

富山方言

- c.  $[_{NP} [_{NP} [_S \text{ 赤い}]] \text{ が} ] \text{ の帽子}$   
d.  $[_{NP} [_{NP} [_S \text{ アンパンマンついとるが}]] \text{ のコップ}$

しかし、このような形での発話は実験の中では引き出されなかった。このことから、関係節との主要部との間に過剰生成された範疇は名詞(N)ではなく、補文標識(C)であることになる。すなわち、(4)のような過剰生成された名詞句の構造は(23)のようであると考えられる。面白いことに、この構造は、英語の関係節の構造である(24)と比較してみると、主要部の位置が異なるだけで、同じ構造となっている。



すなわち、(4)のような過剰生成をしているこどもは、そのとき、語順は日本語の大人の文法と一致するが、構造は英語の関係節の構造と同じものを持っていることになる。このことは、英語を母国語とする子供に同様の過剰生成がみられないことにも説明を与える。

Murasugi (1991) ではこれらの論議をもとに、まず、第一に、言語獲得研究の中で問題とされてきた過剰生成されている「の」は(少なくとも関係

係節を産出できるような言語獲得段階にある子供についてのそれは、補文標識の「の」であり、属格、及び名詞ではない可能性を示す。そして、関係節を獲得する上で、日本語を母国語としている子供は、ある言語獲得段階で、日本語の関係節として、補文標識がある英語の関係節の構造を設定すると提案する。この事は更に、子供の文法獲得において、構造に関するパラメーターの再設定がありうることを示唆するものである。

以上、実証的研究と理論が結びつく上で、方言が重要な役割を果たしていることを示したが、興味深いことに、富山方言の大人の文法と子供の過剰生成にみられたパラダイムと同様のものを、韓国語からも得ることができる。(25)が韓国語の例である。韓国語の大人の文法において、属格の「の」に相当するのは、「uy」であるが、これは、名詞に相当する「kes」や補文標識に相当する「kes」とは、異なった音形をもってあらわれる。そして、日本語と同様に、韓国語の大人の文法において、関係節と主要部の名詞との間には、補文標識は挿入されない。富山方言と比較してみると、音形は異なるが、そのパターンは同じものであることがわかる。

(25) 韓国語の大人の文法

Genitive Case: *uy*

a. [<sub>NP</sub> [<sub>NP</sub> Chelsu] *uy* *cha*]

Gen car

(Chelsu's car)

b. [<sub>NP</sub> [<sub>PP</sub> Hartford *roputso*] *uy* *ku* *kicha*]

from Gen the train

(the train from Hartford)

Category N: *kes*

c. [<sub>NP</sub> [<sub>NP</sub> Chelsu] *uy* *kes*]

Gen one

(Lit. Chelsu's one)

d. [<sub>NP</sub> [<sub>S</sub> Nae *ka* mekko-iss *nun*] *kes*]

I Nom eating one

(what I am eating)

Category C: *kes*

e. [<sub>CP</sub> [<sub>IP</sub> totuk *i* ton ul hunchin] *kes*] un eyki lopute ta

robber Nom money Acc stole C Top here from Cop

(It is from here that the robber stole the money.)

Relative Clause

f. Chelsu *ka* ilk un (\**kes*) chaek

Nom read book

(the book that Chelsu read)

このような大人の文法をもつ韓国語を母国語とする子供が、(26)のような過剰生成をしていることが、Kim (1987) によって報告されている。

(26) 韓国語を母国語とする子どもの過剰生成: *kes*

[<sub>NP</sub> [<sub>rel</sub> *ci* accessi otopai tha-nun] *kes* soli] ya (Kim, 1987)

uncle motorcycle ride-Pres sound is

((This) is the sound that a man is riding a motorcycle.)

([<sub>NP</sub> [<sub>rel</sub> *ci* おじさんがオートバイにのってる] の 音])

富山方言と同様、ここで過剰生成されているのは、属格の「uy」ではなく、やはり「kes」である。

さらに、富山方言や韓国語と同じパラダイムは、日本語の他の方言においても見られる。(31)は熊本方言の大人の文法を示す例である。

(27) 熊本方言の大人の文法

Genitive Case: 「の」

a. [NP [NP 山田さん] の 本] b. [NP [PP 大学まで] の 道]  
Category N:「と」

c. [NP 赤か と] d. [NP 走っている と]

cf. 生からたぶつとは、よくないよー

(生で食べるのはよくないよ)

Category C:「と」

e. [CP [IP だろぼうが金を盗んだ] と] はここからだ

熊本方言において、属格助詞は「の」であられるが、名詞に相当するものは「と」であり補文標識に相当するものはやはり「と」である。富山方言や韓国語と比較してみると、そのボタンが同じであることがわかる。そして、このような大人の文法をもつ熊本方言を話す子供は、(28)のような過剰生成をする。

(28) 熊本方言を母国語とする子供の過剰生成:「と」

[NP [rel cl 青か] と ぶうぶう] (T: 3;5)

いずれの言語においても、少なくとも、関係節を産出することのできる段階の子供が過剰生成をしているのは、大人の文法ではNまたはCの範疇に属する「の」である。(4)のような過剰生成を子供がなぜするのか、また、過剰生成されている「の」は何かという問題について言語理論の見地から捉えるときに、重要なデータが、韓国語や富山方言、熊本方言といった「言語」と「方言」の両方から同様の形で得られるのである。

### 3 「大主語」の格: 熊本方言からの貢献 (吉村, 1994)

前節の終わりに熊本方言からの言語理論への貢献について述べたが、熊本方言は、格理論にも興味深い言語事実を提供する。

日本語は、英語と異なり、「Multiple Subject」を許す言語としてよく知られている。(29 a) 及び (29 b) に示すのがその例である。

(29) Multiple Subject

- a. 熊本が馬肉がうまい
- b. 日本が女性が平均寿命が長い
- c. The horse meat is tasty
- d. She saw him
- e. It is Kumamaoto where the horse meat is tasty

(29 a) および (29 b) のような例において、「が」によって格表示されている名詞句は、どのように格付与がなされているのであろうか。英語は、(29 d) に示すように、代名詞が主格や目的格等の格の関係を明確化するが、このような言語において (29 a) や (29 b) に対応する例は、(29 e) のようになる。(29 e) では「tasty (うまい)」のは、「Kumamoto (熊本)」ではなく、「horse meat (馬肉)」であり、「熊本」は、明らかに主語ではない。

Kuroda (1988) は、(29 a) の「熊本」や (29 b) の「日本」「女性」などを総じて「major subject (大主語)」と称し、この種の「主語」をいわゆる叙述の主語と区別している。(30)に示すように、(29 a) や (29 b) の例において、叙述の主語は「馬肉」や「平均寿命」であり、大主語は「熊本」、「日本」、そして「女性」である。

- (30) a. 叙述の主語: 馬肉, 平均寿命  
b. 大主語: 熊本, 日本, 女性

では、大主語はどのような統語的メカニズムに基づいて、「が」を伴ってあらわれるのだろうか。「が」の格付与のメカニズムについては、大きく二

つの理論的分析が提案されている。ひとつは、「叙述の主語」と「大主語」というように意味的に区別されるものは、統語的にも区別して扱うべきであるとするものである。いま一つは、たとえ、意味的に区別されるとしても、統語的には統一的に扱うとするものである。後者の立場は、理論的にもより自然であり、また、東京方言を見る限りにおいて、叙述の主語と大主語が、同じ「が」で音表示されていることから、反例がなく、支持されるように思われる。たとえば、Saito (1982) や Takezawa (1987) においては、後者の方向で格理論の構築がなされている。

ところが、吉村 (1994) は、「が」の格付与について、Saito (1982) や Takezawa (1987) のような、「叙述の主語」と「大主語」の「が」を統一的に扱う方向性に対して反例を提示する。そして、むしろ、前者の仮説の方向性、すなわち、意味的な区別がなされる複数の「が」は、統語的にも区別して扱われなくてはならないことを、熊本方言の記述的研究を基に論じている。

熊本方言においては、叙述の主語は、所有格の「の」と同じ音形をもつ「の」であらわされる。

(31) 格助詞「の」:

- a. 太郎の娘の昨日結婚した (太郎の娘が昨日結婚した)
- b. あん人の息子の赤か車ば買った (あの人の息子が赤い車を買った)

そして、興味深いことに、この方言では、大主語は「の」ではなく、「が」であらわれることを吉村 (1994) は指摘する。

- (32) a. \*熊本の馬肉のうまか  
(のが可能になる読みは“所有”の意味のみ)
- b. 熊本が馬肉のうまか

(32)に示すように、熊本方言では、大主語の「熊本」は「が」でマークされなくてはならない。もし、「の」であらわされると、それは所有の意味となり、文全体が「熊本で得られる馬肉」に関する叙述として解釈される。

同様に、東京方言の (29) に相当する熊本方言は (33 b) である。

- (33) a. \*日本の女の平均寿命の長か
- b. 日本が女が平均寿命の長か

この場合も、大主語の「日本」と「女」は、「が」でマークされなくてはならないのである。

以上の事実に基づいて、吉村は(34)–(35)のような結論を導き出している。

- (34) 熊本方言では、「叙述主語」の名詞句は「の」で格標識される。  
他方、大主語の名詞句は「が」で格標識される。
- (35) 東京方言においても「叙述の主語」と「大主語」が同一の統語メカニズムに基づいて「が」を付与されているとは考えにくい。

このように、東京方言の言語事実では明らかにならない経験的な区別が、熊本方言をみることで明確になる。そして、吉村 (1994) の熊本方言の研究は、大主語の実在性、及び、「が」の格付与に関する格理論について、直接的な経験的証拠を与えるものである。

#### 4 能格動詞の特徴とその実在性：沖縄方言（琉球語）からの貢献 (本田, 1995)

本節では、動詞の性質について考える上で、方言研究が証拠を与える可能性のある例について述べる。特に能格動詞の心理的実在性について扱う。

一般に、他動詞や自動詞とよばれる *throw*, *dance* のような動詞は、(36) — (37) にまとめるように、主語には「行為に担い手」(Agent)、目的語には「行為の対象」「移動、変化するもの」(Theme) があらわれる。

- (36) a. John threw the ball  
b. John danced

(37) John (ジョン) : 行為の担い手 (Agent)  
ball (ボール) : 行為の対象, 移動, 変化するもの (Theme)

(36 a-b) において、ジョンはいずれも、ボールを投げたり、踊ったりする「行為」の担い手である。そして、(36 a) において、「ボール」は行為の対象であり、投げるという行為の結果、移動するものである。

しかし、この一般化に対して一見反例になるように見えるものがある。その典型的なものが受動態と称される文である。

- (38) [The ball] was thrown [ ] by John

(38) のような例では、行為の対象、すなわち Theme となるものが主語の位置にある。しかし、このような場合は、「ボール」は、基底の構造 (D-構造) では目的語の位置に生成され、主語の位置へ格を得るために移動していると考えられている。すなわち、(39) のような一般化に対して、受け身形は反例とはならない。

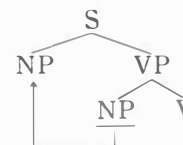
- (39) D-構造では、主語の位置に Agent が、目的語の位置に Theme となるものがあらわれる。

上記の一般化に反例となるように思われるもう一つの例が、能格動詞文である。(40) の例をみてみよう。

- (40) a. The ball fell from the table  
b. ボールがテーブルから落ちた  
c. ドアがこの鍵であいた

(40) においては、明らかに、主語の位置にあらわれているのは、行為を行う動作主ではない。「ボール」や「ドア」は「移動、変化するもの」であり、「Theme」である。このように「Theme」が主語の位置にあらわれる動詞は能格動詞と呼ばれ、Agent を主語にもつ「踊る」等の非能格動詞と区別される。そして、このような動詞をもつ文において、受動態の場合と同様に、基底構造では、「Theme」となるものが目的語の位置に基底生成され、主語の位置へと移動し、その位置で格付与がされると考えられている。能格動詞の特徴をまとめると以下ようになる。構造は (41 c) に示すものである。

- (41) a. 主語に「Agent」ではなく「Theme」が表れる。  
b. 「主語」は動詞句の中に基底生成される。  
c.



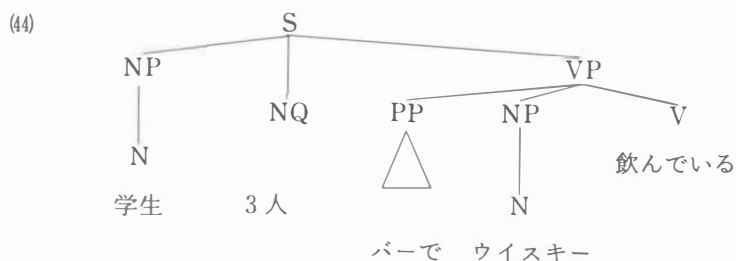
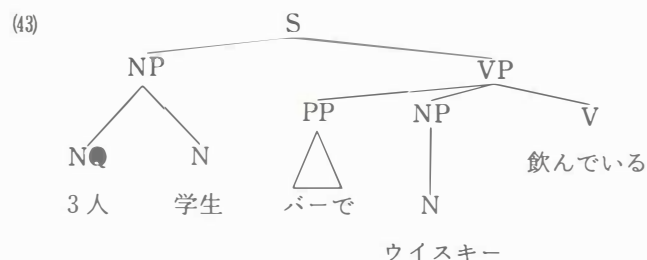
(41) の提案については、統語理論からいくつかの裏付けがなされている。その例として、Quantifier Floating と呼ばれる統語現象から能格動詞の心理的実在性を検証した Miyagawa (1988) の議論がある。

日本語において、数量詞は比較的自由な位置にあらわれる。たとえば、

(42)がその例である。(Haig, 1980; Kuroda, 1980, 1983; Miyagawa, 1988 を参照。)

- (42) a. 3人の学生がバーでウィスキーを飲んでいる  
 b. 学生が3人ウィスキーを飲んでいる  
 c. 学生が2本のウィスキーをあけてしまった  
 d. 学生がウィスキーを2本あけてしまった

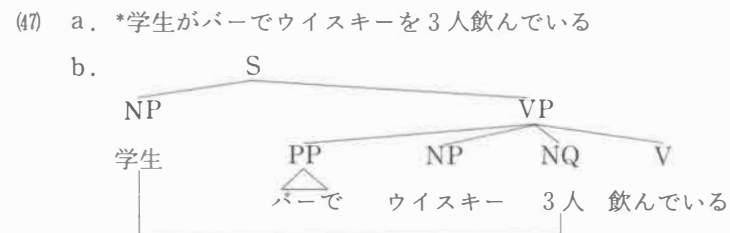
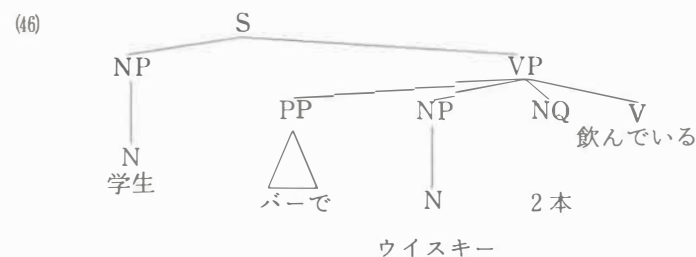
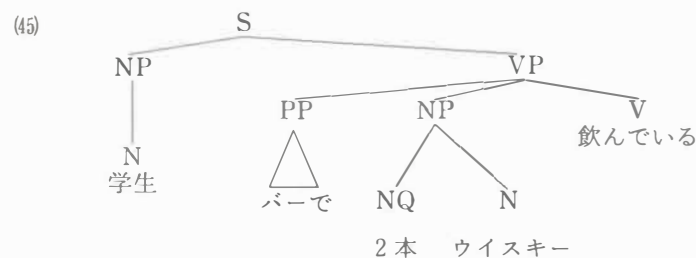
(42 a) の構造は(43)のようなものであり, (42 b) の構造は(44)のようであると考えられる。



また, (42 c) の構造は(45)のようなものであり, (42 d) の構造は(46)のようであると考えられる。

Haig (1980), Kuroda (1980, 1983), Miyagawa (1988) などによって

数量詞とそれによって修飾される名詞句が, 同じ範疇に直接支配される姉妹同士の構造関係にあるとき, 文は文法的となることが提案されている。この仮説は, 更に, (47)が非文であることから裏付けられる。



動作主であり, 主語の位置にあらわれる「学生」と, その数を示す「3人」とが, 同じ範疇に直接支配される姉妹同士の構造関係にないためにこの文は非文となる。より一般的には, この仮説から「動詞句内の数量詞は, 主



ころである。沖縄方言についての記述的な研究を詳しく調べてみると、この二つの助詞の区別について実にいろいろな記述があることが明らかになる。たとえば、沖縄方言のなかでも南琉球新城島の方言では、「ぬ」が能格動詞についても非能格動詞についても格表示をするが、いずれの場合も助詞は省略できると杉村（1992）は報告している。

- (52) a. uja: (nu) ju izi si:kasha:ruN (親がよく言って聞かせる)  
 b. ba: (nu) pa:ruN (わたしが行く)  
 c. pa:na (nu) tsikuN (花が咲く)

典型的な能格動詞をもつ (52 c) のような場合に助詞「ぬ」が省略されるだけでなく、方言記述者によっては、「言う」などの明らかに動作主を主語にとるものについても助詞は省略可能であるとしており、これは本田(1995)の結論への反例となりうる。これらについては、今後の研究が待たれるところである。

いずれにせよ、もし、この沖縄方言の「ぬ」と「が」の区別が、能格動詞と非能格動詞の区別を反映したものであれば、前者は後者に対する直接的な証拠と考えられる。このことは、方言の研究が、言語の研究と同様の重要性をもちうることを十分に示すものであろう。

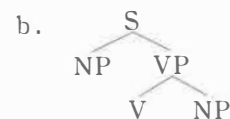
## 5 日本語における構造の階層性と移動の実在性：関西方言からの貢献 (Saito, 1984)

以上、2節から4節では、いわゆる「言語」のみならず、「方言」から得られた経験的事実が統語理論を発展させていく上で重要な証拠を与える可能性のある例について、1990年代のものを中心に概観した。以下、1980年代に提案された統語理論的研究の中で、前述と同様、方言の言語事実が仮説を証明する上で用いられた研究の一例を示す。

1950年代より、生成文法理論は人間の脳に内在する普遍文法のメカニズムについて研究を積み重ねているが、先にも述べたように、その殆どはいわゆる「言語」単位のデータを基に研究がなされたものである。「言語」の適正な記述に基いて理論が提案され、更に、提案された理論が多くの「言語」事実について説明力をもつものか否かを、別の「言語」で検証するという形で研究がなされている。しかし、「方言」から経験的証拠を引き出し、いわゆる「言語」の現象とパラレルな方言の事実に基づいて、理論を提案したり検証したりする例もある。例えば Saito (1984, 1985) においては、英語と関西方言との比較を基に、日本語に階層性があること、及び移動があることについて論じている。

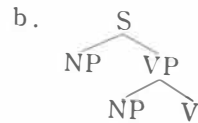
英語と日本語の違いとして、英語が階層的な構造を持つのに対して、日本語には、階層がないとする仮説が Hale (1983), Farmer (1980) 等によって提唱された。例えば、英語では、(53 a) のような例は (53 b) のような階層的構造を持つ。

- (53) a. John saw Mary



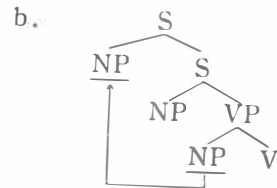
それに対して、(54 a) のような日本語の例文は、もし日本語の統語構造が階層的であれば、(54 b) のような構造をもつことになり、もし、日本語が階層的な構造をもたず、むしろ平坦な構造をもつとすると、(54 c) のような構造をもつことになる。

(54) a. ジョンがメリーを見た



日本語が階層的な構造をもたないといわれる根拠としては、日本語の語順が比較的自由であることが挙げられる。日本語をはじめ、いくつかの言語においては、「スクランプリング」(かきまぜ)の現象がみられる。たとえば、(55 a)にみられるように主語と目的語の名詞句がかきまぜられても、文としては、文法的である。

(55) a. メリーをジョンが見た



Hale (1983) や Chomsky (1981) では、この「かきまぜ」られた文は、移動によって生成されたのではなく、(55 c)に示すように基底構造で自由な語順がそのまま生成されるとしている。また、Hale (1983) や Farmer (1980)は、世界の言語が階層的な文構造をもつか否かによって分けられ、かきまぜを許す日本語のような言語は、典型的に階層構造をもたない言語であるとしている。

はたして、言語間の違いが構造の形のの違いに起因し、英語のようなタイプの言語は階層的構造をもち、日本語のようなタイプは平坦な構造をもつのだろうか。それとも、構造の階層性には言語間の違いがなく、どの言語も階層的な構造をもつのであろうか。Saito (1984, 1985) では、この問題について、「かきまぜ」現象を題材に考察し、Hale(1983)やChomsky(1981)

の提案を反証する。かきまぜられた文は目的語が文頭に付加する形で移動がおきている証拠をあげ、日本語が英語と同様、階層的な構造をもつことを提案している。

その議論の具体例として、以下のようなものがある。英語において移動を示す例をみてみよう。(58 a)および(58 b)の文において、補文標識 *that* は随意的である。つまり、補文標識の有無に関わらず、文としては文法的である。

(56) a. John thinks (that) Mary is smart

b. John knows (that) the teacher was lying

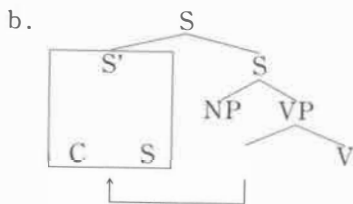
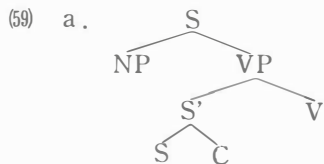
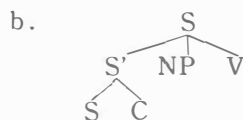
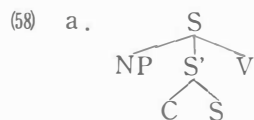
ところが、(57)にみられるように、補文が文頭に移動すると *that* は随意的ではない。

(57) a. [That the teacher was lying], John (already) knew [ ]

b. \*[The teacher was lying], John (already) knew [ ]

文頭に移動し、補部の位置にない補文では、*that* は義務的なのである。この現象は、Stowell (1981) において詳細に検討され Empty Category Principle (空範疇原理) による説明が与えられている。

この説明は、日本語の階層性を考える上で重要な意味をもつ。まず、Hale、及び Farmer の非階層仮説によると、主語と補文をもつ日本語文の構造は(58 a-b)のようになる。他方、日本語に同様の階層性があるとする、(59 a-b)の構造が考えられる。



(58 a) では、主語、補文ともに、動詞の補部の位置にある。(58 b) にみられるように、非階層仮説に従うと、この関係は補文が主語に先行していても変わらない。そこで(58 a)の構造で補文標識が随意的であれば、補文が主語に先行する場合の(58 b)においても同様であることを、Stowellの説明は予測する。他方、(59)の構造を仮定すると異なる予測が得られる。主語が文頭にある(59 a)では、補文は動詞の補部の位置にある。しかし、(59 b)が示すように、補文が主語に先行する場合には、補文は補部の位置から文頭に移動している。したがって、(59 a)の構造で補文標識が随意的であっても、補文が文頭にある(59 b)では、補文標識が義務的になるはずである。

このように、日本語において、補文標識の随意性が観察されれば、補文が主語に先行する場合を検討することによって、非階層仮説を階層仮説とを区別し、検証することが可能なのである。

しかし、東京方言を見る限りにおいては、有効なデータは得られない。(60)の東京方言の例をみてみよう。

(60) 東京方言

- a. ジョンが[神戸に行く] 言った

- b. \*ジョンが[神戸に行く] 言った  
c. [神戸に行く]と ジョンが 言った  
d. \*[神戸に行く] ジョンが 言った

東京方言においては、補文が動詞の補部の位置にあっても、補文標識は義務的にあらわれなくてはならない。補文標識の随意性という現象が、そもそも観察されないのである。

ところが、関西方言をみると、英語とまったく同じパターンを観察することができ、階層仮説が支持される。

(61) 神戸方言

- a. ジョンが 神戸に行く (て) 言うた  
b. [神戸に行くて] ジョンが 言うた  
c. \*[神戸に行く] ジョンが 言うた

関西方言(伊勢、京都を含む)においては、補文が動詞の補部の位置にあるときには、補文標識「て」は随意的である。すなわち、英語の例のように、補文標識はあってもなくてもよい。ところが、この「言語」において、補文が文頭にある場合には、補文標識が義務的になる。したがって、補文標識のない(61 c)のような例文は非文である。これは英語の例と同じパラダイムを示すものである。

重要なことは、もし、日本語が平坦な構造をもっていて、移動がないと仮定すると、この非対称性が説明されえない点である。なぜなら、(58)が示すように、もし平坦な構造であるとすれば、補文が文頭にあってもなくても、補文は動詞と構造的には同じ関係をもつからである。したがって、関西方言と英語の事実の平行性は、日本語が、(59 a)のように英語と同様の階層的な構造をもち、(60 a-d), (61 b-c), ひいては(55 a)のような例では移動がおきていることを示すものであると考えられる。

以上が, Saito (1984) の主旨であるが, この議論の中で興味深いのは, 言語を分けるパラメーターが構造の階層性に在るのか否か, あるいは, 補部が主語に先行する場合に, 日本語においても英語と同様な形で移動が起きるのかといった理論的問題について, 英語という「言語」と, 関西方言という「方言」が重要な証拠を与えている点であろう。前節で述べた例と同様に, ここでも「言語」のデータと, いわゆる「方言」のデータが同じ記述的なステイタスをもって, 統語理論の発展に貢献している。

## 6 結びに

本稿では, 地域を基準として区分された「方言」は, 国を基準として社会的に区分されたいわゆる「言語」と同じように, 統語理論をはじめ言語理論に対して重要な経験的事実を与えることを, いくつかの事例をとって概観した。比較統語論は, 言語学において重要な位置を占めるが, 多くの言語と日常的に接する機会の豊富なヨーロッパ, アメリカ, 南アジア諸国と比べて, 日本にはなじまない分野であると思われるかもしれない。しかし, 方言が言語と同じステイタスをもつことを考慮すれば, 決してそうではないことは明らかであろう。日本は極めて多くの方言を有する多方言国家なのである。

世界の言語 6760 語のうち, 269 語を世界総人口の 96% が話し, 残りの 6 千語以上はたった 4% 程の人口に話されているといわれている。その 4% にしか話されていない膨大な数の言語のうち, 半数が 21 世紀中に消滅するであろうといわれている。更にこれはいわゆる言語のレベルには留まらない。方言の平板化現象についてもまた, 同様の危機が迫っている。幼稚園・保育園などで, 横断的な実験的研究を行うと, 特に都市部において方言を話す子どもの人口が減少しつつあることに気づくものである。

アメリカ言語学会では, ここ数年来, 消え行く言語についての研究や社会的な責任について考えるセッションを設け, 言語学者の危機意識を喚起

している。日本においてもアイヌ語を保存し, その記録を残していくことの重要性が認識されつつある。しかし, それだけではなく, 話者の数が大人, 子供いずれも減少し, 平板化しつつある地域の方言もまた, 守られなくてはならないものである。その危機を, 「方言学者」のみならず広く言語を研究対象とする者が認識する必要がある。そして, この平板化の危機は, 方言の記述の必要性に留まらず, 記述されたデータを言語理論の発展に結び付けていく必要性が, 以前にもまして緊急であることを示唆しているように思われる。

## 謝辞

本稿は, 1997 年 11 月 17 日に東北大学文学部言語学科招待講演会において発表したものに, 加筆修正を加えたものである。また, 本稿の第二節は, 筆者が 1990 年の Boston University 言語獲得会議で発表した論文の一部を簡略化して日本語にて纏めたものである。本稿をまとめるにあたり, 黒田成幸氏をはじめ講演会に出席された方々, ならびに斎藤衛氏から有益なコメントをいただいた。本稿執筆にあたり, 南山大学 1998 年度パツヘ研究奨励金 I-A (特別研究助成) により援助を受けた。ここに記して感謝する。

## 注

- 1) 子供の初期の言語獲得段階 (1 歳 10 カ月から 2 歳前半) においても同様の過剰生成がみられる。Murasugi (in preparation) では, 同じ (4) の過剰生成のデータは, 初期の段階では, 本論とは異なる統語的理由によって起きていることを報告する。初期の段階での (4) の過剰生成は, 子供が時制を少なくとも音声化していない時期に見られるもので, 同時期に子供が産出する形容詞は, 時制をもたず, むしろ名詞と同じ統語的振舞いを示す。従って, 初期に過剰生成されている「の」は属格助詞であり, 本論で扱うところの時制を獲得した後であられる例とは区別されるべきである。

# 参考文献

- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- . (1988) *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Clancy, P. (1985) "The Acquisition of Japanese." *The Crosslinguistic Study of Language Acquisition*. (Ed. by D. Slobin.) Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Hale, K. (1983) "Warlpiri and the Grammar of Non-configurational Languages." *NLLT* 1.
- Famer, A. (1980) *On the Interaction of morphology and syntax*. Doctoral Dissertation, MIT
- Haig, J. (1980) "Some Observations on Quantifier Float in Japanese." *Linguistics* 18.
- Kim, Y. J. (1989) *The Acquisition of Relative Clauses in English and Korean: Development in Spontaneous Production*. Doctoral dissertation, Harvard University.
- Kitagawa, C. and C. N. G. Ross (1982) "Prenominal Modification in Chinese and Japanese." *Linguistic Analysis* 9.
- Kuno, S. (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Kuroda, S. -Y. (1980) "Bun no Kozo (Sentence Structure)." *Nichi-ei Hikaku Kooza II: Bunpoo*. (ed. by T. Kunihiro) Tokyo: Taishukan.
- . (1983) "What can Japanese say about government and binding?" *WCCFL* 2.
- . (1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese." *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*. (Ed. by W. Poser.) Stanford: CLSI.
- . (1992) *Japanese Syntax and Semantics: Collected Papers*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- McCawley, J. (1988) *The Syntactic Phenomena of English*. Chicago: University of Chicago.

- Miyagawa, A (1988) "Predication and Numeral Quantifier." *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*. (Ed. by W. Poser.) Stanford: CLSI.
- Murasugi, K. (1991) *Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Saito, M. (1982) "Case Marking in Japanese: A Preliminary Study." ms. MIT.
- . (1984) "On the Definition of C-command and Government." *NELS* 14.
- . (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Doctoral dissertation, MIT.
- Stowell, T. (1981) *Origins of Phrase Structure*. Doctoral dissertation, MIT.
- Takezawa, K. (1987) *A Configurational Approach to Case-marking in Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Washington
- 大西拓一郎 (1997) "各地の方言生活の特色: 東北" 「国文学」第42巻7号
- 野原三義 (1986) 「琉球方言助詞の研究」武蔵野書院
- 杉村孝夫 (1992) "新城下地島方言の文法" 「南琉球新城島の方言」国学院大学日本文化研究所
- 本間謙介 (1995) "非対格仮説と琉球方言" 日本言語学会第111回大会(口頭発表)
- 吉村紀子 (1994) "がの問題" 「変容する言語文化研究」静岡県立大学